



諸君、卒業おめでとう

最後の最後まで引用（笑）。

語彙が多いとか少ないとかいうけれど、人間はどのくらいの言葉を使うものなのか。

例えば新聞や雑誌に使われている単語は、年間およそ三万語といわれています。しかし、その50～60パーセントは、年間の使用度数1です。つまり、半分の単語は新聞・雑誌で一年に二度とお目にかかることがない。

ちょっと古いけれど、昭和30年代の調査では、高校の上級生が三万語の語彙を持っていたという調査結果があります。今は大学生でも語彙は平均一万五千から二万くらいに落ちているのではないかと思います。読書量がものすごく減っていますから。

生活をしていく上で間に合うという数でいえば、三千語あれば間にあう。だいたい生きていられる。これが、いわゆる基本語です。では、三千語を知っていればいいのか。言語生活がよく営めるには、三千では間にあわない。三万から五万の単語の約半分は、実のところは新聞で一年に一度しか使われない。一生に一度しかお目にかからないかも知れない。しかし、その一年に一度、一生に一度しか出会わないような単語が、ここというときに適切に使えるかどうか。使えて初めて、よい言語生活が営めるのです。そこが大事です。語彙を七万も十万ももっていたって、使用度数1、あるいは一生で一度も使われないかも知れない。だからいらぬのではなく、その一回のために単語を蓄えていくこと。（中略）

なんでもかんでもむずかしい言葉をたくさん覚える必要があるといっているのではありません。そのときどきに、ピタッと合う、美しい表現ができるかどうか。それが問題です。

それが言語能力があるということです。

（大野晋『日本語練習帳』岩波新書）

ここには勉強することの意味が語られているように思うがどうだろう。

例えば浪人した人は、これから勉強する中で、「役に立つことを覚えよう」とか「どの大学でも出題されそうなことを覚えよう」とか考えるだろう。それは仕方ないことである。しかし、勉強の（あるいは学問の）本質は、どうもそこにあるのではないらしい。何の役に立つのか分からないこと、いつ活用できるか見込みのたたないこと、そんなことを、どれだけ幅広く自分の中に位置づけられるかということが重要なのである。

ちなみにこれは詰め込むキャパシティの問題ではない。もちろん多く詰め込むにこしたことはない。人間の記憶装置（脳）は莫大な容量をもっているようだからね。しかし、大切なことは、それらの詰め込んだモノを活性化させ、ネットワークを構築する「チャンス」をたくさん用意することではないだろうか。

例えば本を読む、映画を見る。例えば旅行する、留学する。例えば美術館やコンサートへ行く、作品を創作する。例えば新しいスポーツに挑戦する。例えばボランティア体験に参加する。例えば、例えば…。

君たちの前には、そのようなことにチャレンジできる時間が広がっているのだ。どうか、一生に一度しか使われないような言葉を使う場面にたくさん出会うような、そんな学生生活を、そして、それに続く豊かな人生を送って下さい。

諸君、卒業おめでとう。